

輝かしい労協運動二〇年を振り返って

三重県高齢者生協理事長（元日本労協連理事長） 中西 五洲



熱海の旅館で事業団の全国協議会を設立したのは、昭和五四年だと思いが、それから二〇年の月日が経過している。光陰矢の如しと言うが、時間の経過は速い。

この二〇年間、全日自労の委員長として、失対事業の打ち切りに対抗して、仲間と組織をどう守るか、それに私の全エネルギーを傾注したのであるが、その中から事業団という発想が生まれ、労働者協同組合に発展していった。労働者協同組合運動は労協法の法制化、高齢者生協の全国的展開、さらに新しい協同社会への展望など、着々と発展している（もちろんいろいろの弱点を内包してのことではあるが…）。

これらの諸運動にこそ、混迷している革新の運動を再生させる、大きな示唆が含まれている、そんな気がしてならない。

昭和五三年から始まる、全日自労の合意賛同運動、民主的改革の運動、それに続く事業団全国協議会の設立、日本労働者協同組合連合会の創設、そして今日の労働者協同組合運動や高齢者生協の全国展開、これらは一連の継続的な発展であり、しっかり確認することが大事である。これほど持続的に発展した運動がほかにあるだろうか。その総括のうえに教訓を引き出すことが、たいへん大事だと私は考えている。創設期から労働者協同組合連合会の設立までの概要は、私の「労働組合のロマン」（労働旬報社刊）、「全日

自労三重県本部の五〇年史」(シーアンドシー出版刊)、論文「今何故徹底民主主義なのか」(協同総合研究所)等に述べている。時間があれば、これを纏めてみたいと考えている。

従ってここでは、かいつまんでいくつかの印象的なことを述べてみたい(記憶だけで書いているので、若干の間違ひがあるかもしれない)。

【一】全日自労の合意賛同運動、民主的改革運動は、まったく新しいタイプの運動であり、労働者協同組合運動の原点でもある。日本の労働組合運動でも注目されるべきものである。

この運動に注目する研究者は少ないが、私は多いに研究、分析する価値があると思っている。いわゆる対案運動である。ストライキやデモ等の大衆行動の重要さは、論をまたないが、それだけで激突しても、「単純対決型」闘争の限界は明らかである。失対事業打ち切り反対闘争でも、一万人動員、座り込み、地域共闘などの大行動を繰り返したが、それで自民党政府の攻撃を跳ね返すことは不可能であった。

「民革型」と呼ぶべき新しい闘争形態をあみ出して、事業団の全国的設立などをへて、今日につながっているのである。そこには低迷している現在の労働組合運動にも示唆をあたえるものが含まれている。

これ以上、この問題には触れないが、研究者の皆さんには重要な研究テーマと考えて欲しい。

【2】労働者協同組合運動をふりかえって

労働者協同組合運動を実践的、理論的に組み立て、この一〇年、三重の事業団で具体的に運動をリード

してきた私として、いくつかの感想を述べておきたい。

1 労働者協同組合運動が二〇年間、持続してきたこと、この事実を重く見なければならぬ。そして今新しい発展期を迎えている。もちろん、労働者協同組合運動は試行錯誤が避けられないし、いろいろの問題を抱えていることも事実である。この運動を大発展させるためには、総括を正しくすること、これが求められている。その問題提起は創始者である私がやらなければならない仕事と考えている。

2 私の言う利潤原理体制、つまり資本主義体制は、その矛盾のためにのたうち回っている。私が指摘してきた「人類五つの危機」はいっそう深刻化し、利潤原理体制が推進している新自由主義的政策は危機をいっそう深刻化させている。環境問題はいうに及ばず、人間の破壊が深刻化している。特に人間精神、文化、教育の荒廃は目を覆うものがある。飽くなき利潤の追求、そのための効率化、身を焼くような競争の激化、その結果として強いもの勝ちの社会。一番大事な互助、協同、愛は虚構化されている。

新しい協同社会への転換以外には解決の道はないと思う。その変革と創造の道筋を明示する勢力が形成されず、革新はいまも混沌の中にある。ソ連型社会主義の崩壊の打撃から立ち直れない人々、マルクス主義の教条的弱点から脱皮できないで、代わり映えのしない方向性しか出せない人々、又右傾化を心ならずも受け入れる人々。このような状況の中で、私たちの労働者協同組合運動は新しい協同社会への展望を含めて、その道筋をほぼ、理論的、実践的に提起しつつあると言って良いだろう。何度も言うが、これは画期的なことと私は思う。そして、その運動の輪とネットワークが拡大しつつあることも嬉しい。

【3】二〇年来、労働者協同組合運動の実践してきて、二、三の問題点を感じている。

一つは私物化の危険性である。労働者協同組合を私物化する誘惑は根強いものである。この被害を受けている範囲は予想以上に広く深い。これを防ぐ最良の手だては、民主主義である。

また私たちは「労働者が企業の主人公になる」、あるいは「全組合員経営」の方針を真剣に追求してきた。しかし雇用される経験しかなかった人たちが、「主人公意識」をもつことは並大抵のことではない。一番大事な幹部や活動家の養成の面でも成功していない。これは私たちに問題があるのである。いろいろと内包している問題にメスを入れたいと考えていたが、この小文を執筆中に腸閉塞に襲われ、救急車で入院という事態になってしまったので、今回はふれることができない（幸い手術の必要はないとのこと）。

労働者協同組合運動もいろいろの問題点を内包していることは明らかである。それらを解決する上で一番大事な問題は、私が強調してきた『徹底民主主義』こそが、解決のポイントになっているのではないか。現代では民主主義を理論的・実践的に深めることほど、重要なことはない、労働者協同組合の成否もこれにかかっているといってもよい。

私が思うに、マルクス主義はたいへん私を豊かにしてくれた。ただ一つ私が思うマルクス主義の致命傷は民主主義論が弱いことだ。いや、ないことだ。ソ連をはじめ独裁専制政治を結果として成立させ、崩壊させたのは、マルクス主義の民主主義論の弱さだ、と私は見ている。

これからは、民主主義に強いものが、社会をリードできる。私はそう思っている。最近、連合会の諸君が「七つの原則」を言わないことが少し気になっている。